人間福祉研究
Human Welfare Studies
2009　No. 12，113－127

# 対人援助領域における家族支援研究の動向と課題における考察

飯　田　昭　人※1　　寺　田　　香※2　　黒　澤　直　子※3
斉　藤　美　香※4

## 1．問題の所在

対人援助職に従事している者は，いわゆる困り事などを抱える本人に対するアプローチはもちろん，その家族についてもきちんと考え，配慮していくことが求められる。援助職の職種がソーシャルワーカーであろうが，カウンセラーであろうが，その他であろうが，基本的には同様である。

だが，一概に「家族」と言っても，例えば，不登校や非行の渦中にある子どもの「家族」と，認知症により周囲と様々な軋轢を生じてしまっている本人の「家族」とでは，同じように考えることはできないであろう。前者は主に両親やきょうだいなどが家族であろうし，後者は息子や娘，孫などが家族であろう。

また，今から約30年前に，久保（1982）は，障害者家族研究の傾向を分析し，「障害児をもつ家族は常に副次的で，その研究は家族福祉とか障害者福祉の領域でもそれほど熱心に目を向けられていたと思えない」と述べている。同様に約20年前，北沢（1992）も「知的障害者の家族の問題は理念レベルにおいては，その重要性を指摘されているが，家族は常に知的障害者の背後の存在として研究が進んできた。また，実証的な知的障害者家族問題に関する研究は決して多くない」と指摘している。上記の久保と北沢は障害者家族研究に関しての言及であるものの，他の領域における家族支援研究とそう大きく変わらないものと考えられる。

上記のような背景をふまえ，現在の家族支援研究に関して，どのような特徴，傾向があるといえるのだろうかを明らかにしたいと考えた。そこで本研究では，社会福祉士である寺田と黒澤，臨床心理士である斉藤と飯田が，社会福祉領域と心理臨床領域における家族支援研究について概観ならびに分析検討を行い，家族支援研究の動向と課題について，互いの領域から論じていくことを目指していく。なお，斉藤は学生相談室カウンセラーとしての立場から，心理臨床領域の中でも学生相談領域に特化した家族支援の動向を検討し，飯田は心理臨床領域全般において検討していくこととする。

## 2．方　　法

⑴　分析対象ジャーナルについて

本研究では，筆者ら４名で討議した結果，以下の研究ジャーナルを分析対象にすることとした（表１）。

※1人間福祉学部福祉心理学科　※2人間福祉学部生活福祉学科　※3人間福祉学部介護福祉学科　※4北翔大学学生相談室

キーワード：家族支援研究，社会福祉領域，心理臨床領域，学生相談領域

**表１　分析対象ジャーナル**

| |
|---|
| ・社会福祉領域→『ソーシャルワーク研究』 |
| ・心理臨床領域→『心理臨床学研究』 |
| ・学生相談領域→『学生相談研究』,『心理臨床学研究』（ただし，学生相談に限った），『大学と学生』 |

『ソーシャルワーク研究』と『心理臨床学研究』は，それぞれの領域における著名なジャーナルであることはもちろん，両ジャーナルとも「実践」を意識したものである。『学生相談研究』も同様で，実践研究も多数占めている。実践における家族支援研究に特に着目することとした。

対人援助領域の実践研究において，「家族」を取り上げた研究がどの程度存在しているのか，どのような傾向があるのか分析するために，上記研究ジャーナルを取り上げた。また『大学と学生』においては，実践研究の掲載が多いわけではないが，学生相談領域における研究が網羅されており，この領域を知る上で必要であると判断したため，分析対象とした。

⑵　家族に関する論文の抽出方法について

家族に関する論文を抽出するために，国立情報学研究所のCiNii（サイニー）を用いた。CiNiiの詳細検索において，年度を「2000年～2008年」とし，上記研究ジャーナルを一誌ずつ入力した。その後，フリーワードの欄に「家族」と入力し，ヒットしたものを分析の対象とした。

## ３．社会福祉領域における家族支援研究の動向

⑴　「家族」の変遷とソーシャルワーク

社会福祉分野における「2000年問題」と揶揄された介護保険制度の成立と導入は，“日本型福祉社会論”がその含み資産として暗黙のうちに組み込んでいた「家族」が，もはやサービス供給体として機能しなくなってきている事実を，さまざまな形で露呈する結果をもたらした。

日本における「家族」は，家父長制の下，従順でいつくしみ深い家族愛に満ちた相互扶助の集団として永らく捉えられてきた。しかしながら，産業や地域構造の変化，諸々の時代の移り変わりを背景とした意識変化を伴って，家族の在り様はその形態も機能も役割も，永年親しんできた家族モデルとは明らかに乖離してきている。

1990年に報告された合計特殊出生率は「1.57ショック」と称され，女性が生まないという選択をすることが“ショック”ということばで表現されるほどの衝撃を世の中に与えた。それほど強固にステレオタイプの家族像が社会に浸透していたことが伺える。「結婚すれば出産することが当たり前」，それ以前に「適齢期になれば結婚するのが当たり前」と考える古きよき時代の家族モデルしか持ち合わせない人々には，多様化した今日の家族像はもはや想像の域をはるかに超えた存在として映るであろう。

生態学的な視点やシステム理論がソーシャルワークの分野にも応用されるようになり，それまで「個人」に焦点をあててきたソーシャルワークは，「個人」とそれを取り巻く「環

境」をも視野に入れた関わりへとパラダイム転換をしてきている。さらに介護保険導入と前後して「措置から契約へ」と福祉サービス供給の流れが変化してきたことと相まって，支援を受ける「個人」の立ち位置においても，さまざまな「選択」を迫られるようになってきた。選択をして契約をするということは，自己責任を伴った意思決定のプロセスを成す。個人とその家族を支援する関わりは，また，「自己決定」と「説明責任」,「権利擁護」といった語句で取り囲まれたプロセスであるとも言える。

⑵　研究動向～「ソーシャルワーク研究」を素材として

2000年から2008年にかけて刊行された「ソーシャルワーク研究」において,「家族」を keyword として検索したところ，18編の抽出結果を得た。その中の 6 編は，2000年の Vol. 26 No. 3に特集が組まれた「ソーシャルワーク実践としての家族支援」に収められている。また，2007年 Vol. 32No. 4では「家族の変容とソーシャルワーク」の特集が組まれ，この中にも 6 編が収められている。

藤崎（2000）は，家族支援の論理を解き明かしながら,「家族支援」を強調することでサービス利用者を逆に子育てや介護役割に縛り付ける結果につながりうることに福祉専門職は自覚的になってほしいと注意を喚起している。中田（2000）はセルフヘルプグループとソーシャルワーク援助との異同を検討することを通して，当事者の家族を支援する際のセルプヘルプ活動の可能性について述べている。牧野（2001）は「家族中心サービス」を主たる概念とするラップアラウンドプロセスを紹介し，多様化するソーシャルワークニーズへの対処方法の検討をストレングス理論をベースとして行っている。杉山（2007）は変容する家族を支援する際の 3 つの視点（①家族全体を支援する，②多様なライフスタイル・家族スタイルを理解する，③育児・介護の社会化，社会資源の活用）を挙げ，事例を通しながらソーシャルワークプロセスの解説を行った。

津崎（2000）は児童虐待事例の家族支援の原点は子どもの救済であるとし，家族からの分離保護と再統合のバランスを図ることが，家族支援には求められるとしている。山本（2000）は保育所の機能が多様化している現状を通して，家族支援を行うためにはソーシャルマインドをもった保育士の配置が必要であるとしている。村井（2007）は児童養護施設にファミリーソーシャルワーカーが配置されたことを受けて，まずは家族が抱いている社会（機関）への不信感を取り除くことが支援の第一であると記している。大塩（2007）は事例を通して,「生活の場」で「生活を支援する」ということが即ち家族支援につながるという，母子支援施設における支援の在り方についてまとめている。小林（2008）は，家族の「個人化」が関係の選択性を高める一方で，子どもの生活基盤を不安定で脆弱なものにしていると指摘し，子どものセーフティネットの充実をはかるには，編成的資源の活用力をつけていくことが必要であるとしている。

高齢者の分野では，和気（2000）が介護保険制度の導入を機に社会的介護体制の不備がもたらした無力感や罪悪感から家族を開放させ，新たな視点でソーシャルワークが展開されることへの期待を記している。鳥羽（2007）はジェネラリスト・ソーシャルワークの視点

で家族支援が行われることの有効性と地域包括支援センターが担う「ワンストップサービスの窓口」としての機能の重要性について触れている。介護場面で生じるさまざまなニーズは複合的であることから，幅広い援助技術を駆使することが求められ，さらに家族の相談をたらい回しにしない体制の整備は，初期支援には必須であろう。岡田（2008）は，虐待防止３法を比較し，他法には見られない「養護者支援」が高齢者虐待防止法にだけ明記されていることが特徴的であるとしている。高齢者虐待事例は永年の家族間における生活歴を背景として生じていることから，その複合性ゆえに家族支援も困難を極めることが多い。さらに日本におけるインボランタリー・クライエントへのソーシャルワーク研究がほとんどなされていないことが，支援の困難性に拍車をかけていると分析している。

精神保健分野では，牧野田（2000）が家族支援の最終目的は問題解決能力の修復やその能力を高めることとし，西川（2003）はアルコール依存症者の家族へのアプローチを，治療導入期，静穏期，再飲酒危機期の三期に分類し，各期における家族支援の差異を考察した。さらに西川（2007）はアルコール依存症や薬物依存者の家族へは，ストレングスの視点に立ったエンパワメント重視の援助がパートナーシップにより展開されることを求めていると分析した。

茨木・吉本（2007）によるステップファミリー当事者による支援活動報告は，認知されにくい状況にあるステップファミリーの構成員が抱える問題について，支援にあたる当事者組織などの家族支援システムを地域に作り上げていくことがソーシャルワークの視点からも有効であると述べられている。

三毛（2007）は，「脱家族」を選択するに至った脳性麻痺者のケース分析を通して，生命を維持し生活を継続していくために家族支援の下を脱するに至る背景について分析を行っている。

徳山（2006）は在宅ホスピスケアにおける家族のニーズについて調査を行い，がん患者と共に暮らす「生活者」であり，「社会的な関わりを継続させながら患者のケアを続ける」という家族への視点が，これまでの研究には欠落していたと指摘している。

⑶ まとめ

社会福祉の領域において，「家族支援」は二つの側面から語ることができると考える。ひとつは家族機能を果たし得ない機能不全の家族をどのように支援するのか。もうひとつは家族機能を果たしている家族が今まさに陥っている，一時的な危機的状況をどのように支援するのか。

研究動向からは，その双方に対するさまざまな取り組みが百花繚乱の様相を呈していることが伺えた。多様な概念やアプローチ論を背景に，社会福祉の各分野において「家族を支援する」ことが，もはやソーシャルワークおいて普遍的な業務となっていることも理解できた。家族の在り方が多様になればなるほど，抱える問題も複雑になり，ひとつの分野だけでは支援が困難になってきているのではないだろうか。

もう一点，岡田（2008）が指摘しているように，従来のソーシャルワークはボランタリーなクライエントへのソーシャルワーク支援を前提として考えられている。その支援過程の枠組みから外れてしまっている家族へ向けて

のアプローチ研究は喫緊な課題であろう。特に児童・高齢者分野における虐待やドメスティク・バイオレンスの事例，ネットカフェ難民と呼ばれる定住所を持たない非正規労働者層へのソーシャルワークは，当事者だけではなく，家族や周辺の地域社会をも取り込んだ関わりが必要となることもある。しかし，その抱えている問題の特殊さ故にボランタリーなクライエントとはなり難い。特に家族問題が複雑に絡んでいる場合にはなおのことであろう。インボランタリーなクライエントとその家族への支援研究の充実が望まれる。

## ４．心理臨床領域における家族支援研究の動向

### ⑴　「家族」を考える視点

村瀬（2006）は家族の定義について「その構成員が結婚，血縁（擬制的関係をも含む）により，結合する基礎的社会集団であり，その基本機能としては子どもの社会化機能の基礎的領域を担う。生活の相互保証機能，および家族成員のパーソナリティの安定化機能がある（布施，1992)」ととらえ，続けて，以下のように述べている。「家族を考える場合，まず第一に，一人称単数つまり『わたし』の側面でとらえる場合，主観的・内省的色彩を帯びたものとなる。各自の家族イメージなどがその例である。次に，一人称複数つまり『わたしたち』という側面で考える場合であるが，それは社会的・制度的・文化的視点であり，家族についての暗々裏の慣習や家族法などがその現れであろう。第三に，三人称的つまり客観的・科学的な視点でとらえる側面がある。さて，臨床場面で家族にかかわる場合，家族に対しては，よい意味でのバランス感覚ある統合的・包括的な理解が必要であろう。自分の個人史に色濃く彩られた『一人称的』側面に偏った理解（端的に言えば，自分の価値基準に則り，それに相対的視点での吟味を加えない考え方）は，それが鋭利なものであっても，相手の世界に添った理解をすることを，時に難しくする。これは臨床においては不適切であろう。どれか一つの側面に偏るのでなく，これら三側面からの理解を統合的・包括的に行うことが求められている（村瀬，2006)」

上記の村瀬の視点から，臨床場面において家族について考えていく場合，一元的な見方ではなく多面的であることが求められ，安易な理解は慎むべきであることが示唆される。

実際の臨床場面では，悩みや問題を抱える当人のおかれた状況や相談意欲の高低などのさまざまな要因により，家族との接し方，アプローチの仕方が異なってくる。例えば，重い障害を抱えた子どもへの支援活動については，その子どもの家族と綿密なやり取りが必要となるであろう。また，非行傾向の少年への対応についても，大半は親のみが相談場面に現れ，少年本人が自発的に訪れることは乏しい。これらの例を出すまでもなく，当事者である本人よりもむしろ家族と会って，家族の困り事や要望を確認しながら対応を考えていくことが重要である場合が少なくない。

### ⑵　研究動向～「心理臨床学研究」を素材として

本章では，心理臨床学研究における2000年から2008年までの「家族」に関する論文を概観していく。CiNii において，フリーワードに「家族」と入力したところ，13編ヒットした。そのうち４編は書評であり，実際は９編の研究論文であった。古宮（2003）の摂食障

害に関する研究は次章で取り上げるので，以下に8編の研究論文について概観していく。

大島（2001）は児童相談所のシステムの中で行われている心理臨床の特徴を述べ，子どもが起こしている問題行動は「家庭という器のなかで継続的に起こっている子どもと家族の相互作用の結果」と発想している。その後，中学生女児の家出の事例を紹介し，子どもが育つために，子どもおよび家庭にどのような援助が必要か論じている。

茂木（2002）は自閉症の弟をもつ5歳女児との関わりを心理劇的ロールプレイから報告している。自閉症を「関係性の障害」という視点でとらえ，家族成員すべてを援助対象と考えている。きょうだいケアや家族ケアに向けて，自閉症児のきょうだいと家族に対するセラピストの視点が考察されている。

井上・黒田（2003）は末期子宮癌患者の事例を家族面接過程と受け持ちの看護師のカンファレンス資料および医療スタッフのアンケート調査回答から検討し，一般病棟において有効な臨床心理士の心理的援助について考察している。末期癌患者の家族面接を臨床心理士が担当し，患者や家族，そして医療スタッフとの協働のあり方などについて検討されており，特に余命わずかの患者の家族に対する心理的援助のあり方が述べられている。

高橋（2003）は統合失調症者への心理療法において，「支えること」の重要性を指摘し，検討している。この研究では3段階からなる「本人と家族に対する支えの層状モデル」を提示し，その第2段階として「家族の理解を促進するような家族面接も含んで，“家族との生活を支える”こと」として報告している。統合失調症者への心理療法を考えるにあたり，本人だけでなく家族も支えることの重要性を指摘している。

田中・吉井（2005）は小学5年生から中学3年生までを対象に「チャム体験尺度」，「家族凝集性尺度」，そして学校接近感情を測定する2項目の3つの質問紙調査を実施した調査研究の報告である。この研究で女子のほうが男子よりもいち早く親からの自立を始め，一体感を伴う密着した同性友人関係に参入していくと指摘している。

堀田（2005）は4名のシングルマザーを対象に4～5回の自由度の高い面接を行い，父親との離別後，学童期の男児を養育する母子家庭がどのように家族システムを再構成し，回復していくかについて考察した。特に，父親との離別が「父親喪失体験」を引き起こすよりもむしろ，その結果，母親が疲労困憊で育児機能を低下させてしまう「母親喪失体験」が危惧され，母親が育児機能をいかに回復させるかが課題となると述べている。

黒田（2007）は両親がカルト信者であり，幼いころから宗教を中心とした家庭環境で育った“カルト2世”といわれる青年期男性との1年半の心理療法過程を報告した。その中でもカルト2世の彼が自分自身や家族を客観的に見つめることができるようになるなどのアイデンティティの問題，カルト脱会などがテーマとして語られている。

樋口（2008）は心理的虐待とネグレクトによる複合的な被虐待により児童養護施設に入所した女児のプレイセラピー過程を報告している。特に，虐待をした親への支援を含めた家族療法を児童養護施設において実施する取り組みことを踏まえ，被虐待の事実を再構成し，家族再統合をしていくにあたっての，メ

タファのもつ治療的意義について考察している。

⑶　まとめ

取り上げた８編の研究論文が多岐にわたっており，まとめることは困難であるが，８編中６編は事例における実際の家族を取り上げていた。

また，いわゆる当事者本人だけでなく，その家族に対しても何かしらの支援方策について考えられてきているのが特徴といえる。つまり，①「当事者本人の支援のための家族支援」という様相だけでなく，②「当事者本人」と「困りごと等を抱える家族」への双方に対する支援，③家族支援に重点を置き，それが当事者本人の支援へとつながることを目指すといったような家族支援のあり方，の３点が見受けられた。

## ５．学生相談分野における家族支援研究の動向

本章では，実際に大学の学生相談室で臨床実践に従事している立場から，学生相談室における動向に触れつつ，家族に関連する研究論文を概観し，その傾向を論じていく。

⑴　2000年以降の学生相談分野の傾向

2000年に文部省（現文部科学省）高等教育局より，「大学における学生生活の充実方策について－学生の立場に立った大学づくりを目指して－」報告書（廣中レポート）が提出された。これは「学生中心」の大学への転換を促し，学生相談を「人間形成のための教育の一環」として位置づけ，その担い手として専任カウンセラーの充実を打ち出した画期的なものであり，現在でも高等教育機関において影響を与えている。その後2004年度には国立大学が法人化され，組織改変の促進とともに学生支援機関が整備され，カウンセラーは増員傾向にある。また私立大学においては，「全入時代」を迎えて，大学間競争に打ち勝つために「学生サービス」をうりにする大学が増えている。その一担として学生支援の部署が統合されて学生支援が強化され，学生相談室も量質共に広がりをみせている。まさに廣中レポート以来のこの８年間は，大学における学生相談が拡大，充実されてきた時期といえる。

従来，学生相談においては来談した学生への内的作業に焦点を充てた心理療法的アプローチとしての個別支援が主な活動であった。しかし最近は学生の問題も多様化，深刻化されたために，学生相談室内のみでは対応不可能な事例が多くなり，関係機関との連携についての活動や研究が進められるようになってきた。それでも，家族に関連する活動も研究も少ないのが現状である。その理由としては１）小・中・高校とは違い，親と大学との接点が少ない　２）年齢が進み，学生と親との関係が密接ではなくなる　３）大学の時期は一般的には親からの自立がテーマとなる青年期後期に属するので，親が学生相談に登場することが学生本人の自立に影響を与えかねないという理由で積極的に取り入れられない傾向があることが考えられる。

学生相談の場に家族が登場するのは，学生の生死に関わること，自傷他害の恐れがあるような緊急の事態が起こった際や不登校や引きこもりが長期化し，学生本人が大学に来られない場合，いわゆる家族に登場してもらうしかない状況に迫られてという場合がほとんどある。従って，不安を抱え，緊迫した状況におかれる家族への対応には様々な困難や工

夫が必要となってくる。筆者の経験でもどちらかといえば，学生本人との面接よりも，家族との関わりの方が苦慮し模索しているのが現状である。

そこで，本稿では，「学生相談研究」「心理臨床学研究」「大学と学生」を対象として研究動向の整理をし，近年の学生相談分野における家族支援研究の動向について調べることで，より良い家族支援のあり方について検討することを目的とする。

⑵ 学生相談分野における研究動向～「学生相談研究」「心理臨床学研究」「大学と学生」を素材として

2000年から2008年に刊行された「学生相談研究」において，CiNii で「家族」「親」という key word で分類される研究は 6 編ある。山中（2004）は精神疾患を持つ親との関係を見つめていく心理療法を行った事例を報告している。また荒井（2005）はカウンセリングに家族関係の視点にたって，イメージワークを取り入れたことが効を奏した大学院生の事例を報告している。これらの研究は，学生本人との心理療法のセッションの中で語られる「家族」を取り扱ったものである。これ以外に直接学生相談場面に訪れた家族への援助をテーマにしたものは以下にあげる 4 編ある。

岡（2006）も述べているように，ひきこもりの場合は事例によっては最後まで家族の来談という形をとる場合もあるが，以下の 2 つの研究は家族の来談が必要不可欠であったものである。

大石（2004）はひきこもりはじめた学生の保護者がまず，相談室に来談し，それを契機に学生本人が相談室につながり，継続面接を経て，大学への復帰を果たした経過を細やかに報告している。これと同様に，まず保護者が大学側とつながることで学生本人の援助につながった研究としては，関川（2005）がある。これは不登校の男子大学生を持つ母親との面接を軸にした事例研究であり，母親を支えることで家族内にも変化が起き，結果的には学生本人が再登校し，学生生活を全うできた経過とともに，本人が来談することが難しい不登校の場合の親面接の意義を述べている。

次に齋藤（2006）は所属する機関における１年間の相談事例を親・家族の関わり方によって分類を行った。その上で親や家族の関わりを積極的に活用することが効果的に学生援助に役立つことを明らかにした。これは学生相談においては学生本人の内的作業を重んじる心理療法的アプローチが主流であり，家族の関与はあくまでも二次的なものというような従来のあり方に一石を投じ，家族もカウンセラーと協働して学生を援助する一員であり，ネットワークで支えるという発想の転換の必要性を迫ったものである。

松下（2007）は学生相談に来談している学生の家族を対象に「ファミリーグループ」を立ち上げ，継続的に活動している。その報告の中でファミリーグループは大学－家族－学生をつなぎ，参加者が共に学び，互いに支えあう場所として大きな役割を果たしていることが述べられている。このファミリーグループの実践は，学生相談において主流である，家族とカウンセラーとの個別的で事後的な関わりとは全く違う予防的な視点にたった，集団療法的アプローチという形で行う家族支援という画期的なものである。筆者の個人的な感覚ではあるがこの研究は「家族支援」という言葉がスムーズにフィットする。

これ以外に直接家族をテーマにした研究ではなくとも，近年一種のブームになっている発達障害の学生への支援については家族も含めた支援の必要性が強調されている（岩田 2004,西口　2004）。この分野においては障害の告知やその後のフォローなど家族への関わり方にも様々な課題が山積されている。今後も更なる研究の発展が予測される。

次に「心理臨床学研究」の2000年から2008年までの研究論文についてであるが，これについては前章で述べているので，ここではその中で大学の学生相談室の場で行われた事例研究についての研究論文１編を挙げる。

古宮（2002）は摂食障害の学生が現実の面接場面に家族は登場しないが，学生本人の家族イメージが変容するとともに症状が改善されたことを報告している。この事例のように，家族が現実の場面に登場せずとも，学生の内的世界での家族イメージが変化することで学生自身が変化できるという場合は学生相談の場では多い。

ちなみに2007年の心理臨床学会における自主シンポジウムでは「学生相談における家族支援」のテーマが取り上げられた。そこでは前述のファミリーグループだけではなく，家族向けガイドブックなど家族支援の方策について，より具体的で明確な活動が報告された。

次に独立行政法人日本学生支援機構で発行されている「大学と学生」では「家族」をテーマに扱った研究は見られないが，保護者との連携の必要性については多くの研究で述べられている。

山本（2004）では摂食障害の学生の事例を元に，カウンセラー自身が“保護者に助力を求める”という姿勢の大切さについて論じている。また，北島（2007）では，まず個人・家族・大学の各レベルにおけるアセスメントをきめ細かくたて，その上でサポートシステムを構築し介入していく方略について述べられており，家族の援助力を信頼することの重要性を指摘している。これらの研究はカウンセラーがイニシアチブを持って学生を援助するというスタンスではなく，カウンセラーは家族を含めたあらゆる援助力をつなげていく，いわばコーディネーター的姿勢で関わることの大切さを述べた点では相通じるものがある。

一方，家族への情報提供や啓蒙活動の側面として，早坂（2005）は，五月病の学生への支援の一つとして保護者に「大学入学後に急に大人扱いしないように」理解を求め，少しずつ新しい環境に慣れることを提示していく必要性について述べている。

⑶　まとめ

2000年からの研究動向はおおよそ以下の３点に分類される。

① 学生本人の心理療法の中で語られる心的イメージとしての「家族」を取り扱う事例研究
② 主に，不登校，ひきこもりなどの学生本人に代わり学生相談場面で出会う，現実の「家族」との対応を取り扱う研究
③ 家族との連携のあり方，方法論を取り扱う研究

家族との連携のあり方を扱う研究はこの数年で方向性が変化しつつある。今までは学生本人の援助が大きな柱になっており，それに必要がある場合は家族が加わるという，家族は言ってみれば「付加的」な存在であった。その背景には，来談学生にはマイナスの家族イメージを持つものも少なくなく，学生と家

族は相容れないものとして，学生相談担当者の気持ちの中では必要な時は仕方ないが，普段は積極的には家族には接触しない方が無難であるという心理が働きやすいことも考えられる。しかし，特に2005年以降は，家族は単に付加的なものではなく，家族も co-thrapist という立場で積極的に学生支援の輪に入ってもらうような，「協働」という視点の大切さが述べられている研究が増えてきている。今後は松下（2007）の研究のように，単に学生相談担当者のみが縦方向に一方的に家族を支援するのではなく，家族同士がお互いに支援しあう，家族と学生相談担当者も手をとりあうような，横の相互性も含めた「家族支援」もより重要になってくると思われる。

一方では，最近は「クレーマー化する親」が教育界では問題となっている。高等教育機関においても，大学側に最初から敵対してくる親や事件性のある事例（ハラスメント，自殺，薬物など）への危機介入の際の親への対応など，従来になかった場面での家族への援助に迫られることが増えている。これについても，諸学会や研修会では近年トピックスになってきており，今後の研究が進められているところである。

## 6．家族支援研究の課題について

社会福祉領域から捉えた家族支援研究と，心理臨床領域から捉えた家族支援研究による傾向の違いはたしかに存在する。だが，双方の領域ともいえることは，永石（2007）が指摘しているように，「家族支援に関する研究は“専門家の枠組みで親を捉える”という一方向的認識論からの変化を見せつつある」ということである。家族支援を双方向的に捉えなおす研究（飯田ら，1999）など，家族の視点を導入した家族支援研究が2000年以降も盛んになっていることが本結果からいえよう。

一方，家族の視点を重視しようとしても，家族の参加，協力が困難なケースも依然少なくない。深刻な虐待事例の多くはまさにその典型であろう。家族の参加，協力が望めないケースに関して，関係機関による協働が求められるとともに，家族内における養育機能の回復などに主眼を置いた支援方策が必要とされるであろう。

現代は，専門家が一方的に支援におけるイニシアティブをもつのではなく，例えば支援を必要とされる当事者本人や家族の視点が，まだ十分ではないにせよ重視されてくるようになった。この点に関しては本当によい傾向だと考える。それを可能としたのは，援助理論や技法をはじめとした，さまざまな考え方などがインターネットなどを通じ，容易に知ることができるようになったからであろう。だが，理論や技法，知識などが即，当事者本人や家族の支援に結びつくわけではないことも自明である。特に家族に対する支援については，家族の何を，どこまで「支援」するのか，そして「支援」をすることで，その家族はもちろん，当事者本人にどういう利益があるのかを考えることが重要であり，またこちら側が「支援」をしているつもりでも，それが家族の利益につながっているのかということについても真剣に考えていく必要があるだろう。

家族支援を考えるにあたり，「当事者本人の願いや考え」と「家族の願いや考え」をどのように実際の支援に組み込んでいくかという課題が立ちはだかる。

我々は本研究から「どのような家族支援が当事者本人の最善の利益を保証するのか」という命題と，「どのような家族支援が，その家族構成員にとってサポーティブな力となるのか」という命題を相補的な形で考えていく必要性を考えることができた。これらの点についてはさらに詳細に検討していくことが今後の課題といえよう。

## 7．おわりに

我々は北翔大学学術情報センター「ポルト」の家族支援研究グループで，社会福祉士と臨床心理士という異なる職種の者同士が，真に意味のある家族支援研究を，セクショナリズムの壁を越えて考えていくという理念をもって活動している。

研究グループ内の討議において痛切に感じたのは，同じ対人援助職であるにもかかわらず，あまりにも互いの領域のことについて無知であるということであった。用いる概念や専門用語などが異なる場合があるものの，今，何が求められるのか，研究者であり実践家として，家族支援という枠組みで何ができるのかを考えていくことに，職種の違いはさほど意味がないと考える。

今後も我々個々の臨床実践と研究活動を循環させ，意味ある家族支援研究について考えていきたい。

## 付　　記

本研究は，平成20年度「私立大学等経常費補助金特別補助　地域共同研究支援」・北翔大学「北方圏学術情報センター研究費」の助成を受けて実施された。

## 8．文　　献

①社会福祉領域における家族支援研究の動向においての引用・参考文献

岡田朋子（2008）：「高齢者虐待と家族支援の課題」ソーシャルワーク研究 Vol34No．2（134）129-135

小林理（2008）：「子どもと家庭のセーフティネットと子育て支援―概念と背景の整理を中心に」ソーシャルワーク研究 Vol34No．3（135）193-201

三毛美予子（2007）：「家族と暮らしていた脳性麻痺者の自立生活選択背景から考えるソーシャルワーク」ソーシャルワーク研究 Vol33No．2（130）15-21

茨城尚子，吉本真紀（2007）：「NPO における家族支援とソーシャルワークーステップファミリー当事者による支援組織の活動から」ソーシャルワーク研究 Vol32No．4（128）302-309

西川京子（2007）：「アルコール・薬物問題をもった家族への支援とソーシャルワークー自助グループとの連携のなかで」ソーシャルワーク研究 Vol32No．4（128）295-301

大塩孝江（2007）：「母子生活支援施設における家族支援とソーシャルワーク」ソーシャルワーク研究 Vol32No．4（128）286-294

鳥羽美香（2007）：「高齢者領域における家族支援とソーシャルワークージェネラリスト・アプローチの視点と地域包括支援センターの役割」ソーシャルワーク研究 Vol32 No．4（128）278-285

村井美紀（2007）：「児童養護施設における家族支援とソーシャルワーク」ソーシャルワーク研究 Vol32No．4（128）272-277

杉山圭子（2007）：「変容する家族とソーシャルワーク」ソーシャルワーク研究 Vol32 No．4（128）262-271
徳山磨貴（2006）：「在宅ホスピスケアにおける家族の心理・社会的ニーズーその構成因子と満足度との関連」ソーシャルワーク研究 Vol32No．1（125）58-65
西川京子（2003）：「三段階に分類したアルコール家族へのソーシャルワークの考察」ソーシャルワーク研究 Vol29No．3（115）202-211
牧野亜希子（2001）：「ラップアラウンドプロセスとストレングズ視点アプローチ」ソーシャルワーク研究 Vol27No．2（106）118-123
中田知恵海（2000）：「セルフヘルプ・グループはソーシャルワークとは無縁か－特に家族の支援について」ソーシャルワーク研究 Vol26No．3（103）216-223
和気純子（2000）：「高齢者とその家族へのソーシャルワーク実践をめぐる今日的課題」ソーシャルワーク研究 Vol26No．3（103）208-215
牧野田恵美子（2000）：「精神保健福祉実践現場の家族支援」ソーシャルワーク研究 Vol 26No．3（103）201-207
山本真実（2000）：「保育所機能の多様化とソーシャルワーク」ソーシャルワーク研究 Vol26No．3（103）193-200
津崎哲郎（2000）：「児童虐待事例の家族支援のあり方」ソーシャルワーク研究 Vol26 No．3（103）187-192
藤崎宏子（2000）：「現代家族と『家族支援』の論理」ソーシャルワーク研究 Vol26No．3（103）180-186

②４．心理臨床領域における家族支援研究の動向においての引用・参考文献

布施明子（1992）いま，日本の家族は　布施他編『現代家族のルネッサンス』青木書店
樋口亜瑞佐（2008）プレイセラピーにおける言葉のメタファの観点からの考察～児童養護施設の虐待の事例から　心理臨床学研究 26(2)129-139
堀田香織（2005）母子家庭の家族システムと回復プロセス～学童期の男児を抱える母子家庭を対象として　心理臨床学研究23(3)361-372
井上直美他（2003）一般病棟における患者，家族，医療スタッフ，臨床心理士の協働　心理臨床学研究21(1)68-79
黒田文月（2007）家族の宗教問題で悩む青年期男性の心理療法～“カルト二世”からの解放と自立　心理臨床学研究24(6)664-674
茂木千明（2002）自閉症児のきょうだいと家族～心理劇的ロールプレイングの観点から見たきょうだいケアの事例　心理臨床学研究20(3)252-264
大島剛（2001）児童相談所の心理臨床の特徴～子どもが「家庭」で「育つこと」　心理臨床学研究19(5)454-465
高橋靖恵（2003）統合失調症を病む青年との心理療法過程～本人と家族に対する支えの層状モデル　心理臨床学研究21(4)362-373
田中良仁他（2005）チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響　心理臨床学研究23(1)98-107
村瀬嘉代子（2006）家族という営みを考える～パラドックスを生きるために　村瀬監修・伊藤編『家族の変容とこころ』新曜社

③５．学生相談分野における家族支援研究の動向においての引用・参考文献

阿部千香子（2008）：2007年度の学生相談界の動向．学生相談研究，29(1)，75-86.

荒井庸子（2005）：イメージ技法を含むカウンセラーからの働きかけを多用した一事例．学生相談研究，25(3)，190-200.

福田真也（2007）：大学教職員のための大学生のこころのケア・ガイドブック．金剛出版.

古宮昇（2002）：家族における役割という視点を取り入れた摂食障害事例の考察．心理臨床学研究，19(6)，688-618.

早坂浩志（2002）：2002年度の学生相談界の動向．学生相談研究，23(3)，66-74.

早坂浩志（2005）：別れ・喪失体験としての五月病．大学と学生，489号，17-24.

岩田淳子他（2004）：発達障害学生への理解と対応に関する研究．学生相談研究，25(1) 32-43.

小林孝雄（2004）：学生相談に関する近年の研究動向－2002年度の文献レビュー－．学生相談研究，24(3)，305-315.

小俣和義（2001）：同一セラピストによる並行母親面接の導入と進め方．心理臨床学研究，19(2)，119-131.

小俣和義（2002）：同一セラピスト母子並行面接における枠の重要性．心理臨床学研究，20(4)，324-335.

小泉隆平（2005）：不登校女子高校生との同一セラピストによる母子並行面接．心理臨床学研究，23(2)，244-255.

北島歩美（2007）：学生相談とサポートシステム．大学と学生，515号，45-50.

松下智子他（2007）：学生相談におけるファミリーサポートグループ活動の試み-援助資源開発的アプローチという視点から-．学生相談研究，27(3)，191-203.

道又紀子（2001）：学生相談に関する近年の研究動向-1998～2000年度の文献レビュー-．学生相談研究，23(3)，338-349.

三戸親子（2005）：学生相談に関する近年の研究動向-2004年度の文献レビュー-．学生相談研究，26(2)，138-156.

松本剛（2003）：引きこもりから抜け出した女子学生との面接．心理臨床学研究，20(1)，64-75.

文部省（2000）：大学における学生生活の充実方策について－学生の立場に立った大学づくりを目指して－．高等教育局報告書

西口夫巳枝・伊藤高廣（2004）：高機能自閉症の学生への卒業までの援助の試み．学生相談研究，25(2)，107-115.

岡昌之（2006）：大学生の不登校とひきこもりとその周辺．臨床心理学，6(2)，173-178.

大石英史（2004）：ひきこもり初期への介入によってキャンパス復帰を果たした女子学生の事例．学生相談研究，25(1)，11-20.

大島啓利（2007）：2006年度の学生相談界の動向．学生相談研究，28(1)，62-72.

太田裕一（2003）：学生相談に関する近年の研究動向－2001年度の文献レビュー，学生相談研究，23(3)，295-312.

齋藤憲司（2002）：学生相談－最近の動向1999～2001－．学生相談研究，23(1)，105-114.

齋藤憲司（2006）：親・家族が関与する相談事例への構えと対処-学生の自立をめぐる支援・連携・協働-．学生相談研究，27(1)，1-13.

桜井育子ら（2001）：危機介入における連携

その１－サポートシステムとして家族が機能しない事例の場合－．学生相談研究，22(2)，105-112
関川紘司（2005）：ある不登校学生の母親面接．学生相談研究，25(3)，179-189.
高橋紀子（2008）：学生相談に関する近年の研究動向－2005年度の文献レビュー－．学生相談研究，28(3)，238-245.
竹森元彦（2000）：スクールカウンセリングにおける，生徒，学校，家庭の支え方について．心理臨床学研究，18(4)，313-324.
恒吉徹三（2003）：母親面接における面接-来談者関係．心理臨床学研究，21(4)，398-409.
鶴田和美他（2006）：学生相談シンポジウム．培風館.
内野悌司（2005）：2004年度の学生相談界の動向．学生相談研究，26(1)，50-61.
山本大介（2004）：苦難を抱える学生への支援．大学と学生，479号，15-24.
山中淑江（2004）：精神疾患の親を持つ学生の自己選択への援助．学生相談研究，24(3)，239-248.
山中淑江（2006）：2005年度の学生相談界の動向．学生相談研究，27(1)，61-70.
吉武清賽（2004）：2003年度の学生相談界の動向．学生相談研究，25(1)，69-81.

④その他の章における引用・参考文献

飯田昭人他（1999）障害児療育における双方向性をもった援助についての考察～親支援を行う治療・教育的連携についての理論的並びに実践的研究　安田生命社会事業団研究助成論文集第35号
北沢清司（1992）発達障害児・者の家族のサポート　発達障害研究14(2)
久保紘章（1982）障害児をもつ家族に関する研究と文献について　ソーシャルワーク研究８(1)
永石晃（2007）重複聴覚障害をかかえる児童･青年期の人々とその家族への支援～子どもと家族への教育的・心理的支援の実践と展開　日本評論社

# Trend and issues in studies on interpersonal family support

Akihito IIDA, Kaori TERADA, Naoko KUROSAWA, Mika SAITO

## ABSTRACT

Trend in studies on interpersonal family support were investigated through a literature review. Research papers related to "family" published between 2000 and 2008 in the areas of social welfare, clinical psychology, and student counseling were read extensively and the trends were discussed.

The results indicated that family support studies today regard not only one-sided support from specialists, but active participation of the person concerned, as well as of the family to be important. Moreover, commonalities were observed in family support in these three areas, when wishes of the person concerned and the wishes of the family were different.

**Key words :** interpersonal family support, social welfare, clinical psychology, student counseling